

## ジェンダーをめぐることばの受容と矛盾： 乗り越えてきたこと、乗り越えられないこと

佐々木恵理

1980年代半ばごろまでは、日本語には「女ことば」と「男ことば」があり、およそ女は「女ことば」を、男は「男ことば」を話すとみなされてきた（壽岳 1979、井出 1979）。しかし、本質的な意味において、「女ことば」や「男ことば」というものがあるのか、あるとしたらそれは具体的にどのようなことばなのか、また実際に女であれば「女ことば」を、男であれば「男ことば」を使っているのかという疑義が起こり、その後、特に1990年代以降、多くの研究によってその実態が明らかになってきた。1990年代は、性差別語が性中立語に積極的に改められた時期でもあるが（佐々木 2001）、これは偶然ではないであろう。

「女ことば・男ことば」は、社会の規範から作り出されたことばづかいであり（中村 2007）、それぞれのことばは2つの性別に振り分けられ、その時代が要請する女と男のあるべき姿を映し出してきた。また、「女ことば・男ことば」は丁寧さ（ポライトネス）の程度・差異であり、女がより丁寧なことばを使う（使わされている）ことから、女が言語的に、つまるところは社会的な劣位におかれていることが示された（宇佐美 2006）。実際には、女が「女ことば」を、男が「男ことば」を固定的に使っているのではなく、場面や立場、話す相手によって、もっぱら会話の戦略（ストラテジー）として横断的に使用していることは自然談話の資料からも見て取れる。

これに「役割語」（金水 2003）という新たな視点も加わった。その定義をなぞれば、「女ことば・男ことば」はある特徴を帯びた「女・男というキャラクタ」が用いる専用語だと解釈できるだろう。「役割語」は架空の言語であり、実際にはステレオタイプ化された「女ことば・男ことば」はほとんど使

われていない。しかしながら、それを解釈・受容する社会の共通認識がなければ「役割語」は成り立たない。共通認識があるからこそ、ドラマ・漫画のセリフや、映画やインタビューにおける外国語の会話体の翻訳語には、キャラクターとして性別化されたことばが使われ続けている。

「女ことば・男ことば」は、個人を一方の性別の中に閉じ込め、不自由な表現を強いる。またそれを使い続けることで、性別への偏見と差別が再生産されてゆく。「自分のことば」を使えない居心地の悪さに気づいているより若い世代は、典型的な「女ことば・男ことば」を使わなくなっているし、固定的な「女ことば・男ことば」の使用に違和感をもっている。こうした状況は、性中立的なことばや表現が提案され議論され選択されてきた過程と重なっていると思われる。

しかしながら、あたかも「女・男ことば」を廃しているように見られる一方で、全体として「女・男ことば」が必ずしも否定的に捉えられているわけでもない。多くの場合は、ある話者のことばの使い方を本人の個性（キャラクター）として受け入れているからである。そのためか、先に述べたドラマ・漫画のセリフや、映画やインタビューにおける外国語の会話体の翻訳語に大きな変化は見られない。むしろ、一部においては、以前にも増して過度にジェンダー化された終助詞があふれ、性差が誇張されている。ちなみに研究者内部では、すでに20年以上にわたり、この終助詞使用に関する指摘がなされてきた。

性差別的ではないことばや表現が行政や企業、教育の場で採用されたり、より若い世代ではことばの使用に性差がなくなっていたりするのもにもかかわらず、実際には性中立語はなかなか浸透していないし、「女・男ことば」から逃れるのはむずかしい。こうした意識はどのようなことから説明できるだろうか。

本発表では、まず、佐々木（2015）で論じた自然談話の中に見られるセリフ（直接話法）のジェンダー表現と「役割語」を例に挙げて、「普通の人」のジェンダー意識を分析した。次に、佐々木（2011）でまとめた性差別語と言語改革に対する大学生の意識を紹介した。これを踏まえて、ジェンダーにかかわることばや表現について、現時点で抱えている矛盾や、現在の枠組みで

ジェンダーをめぐることばの受容と矛盾：乗り越えてきたこと、乗り越えられないこと (佐々木恵理)

はとりこぼしてきた視点を取り上げながら問題提起をし、どうしたらよりよいことばや表現を構築してゆけるのかを考えてみた。

### [参考文献]

井出祥子 (1979) 『女のことば男のことば』, 日本経済通信社.

宇佐美まゆみ (2006) 「ジェンダーとポライトネス — 女性は男性よりポライトなのか? —」, 『日本語とジェンダー』 日本語ジェンダー学会編, ひつじ書房, pp. 21-37.

金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 — 役割語の謎』, 岩波書店.

佐々木恵理 (2001) 「非性差別語への言語改革に今必要なこと」, 『女とことば』, 遠藤織枝編, 明石書店, pp. 228-240.

\_\_\_\_\_ (2011) 「私の『ことばとジェンダー』論 — 大学の授業をとおして言語改革を考える —」, 『ことば』 現代日本語研究会32号, pp. 5-31.

\_\_\_\_\_ (2016) 「直接話法におけるジェンダー表現と役割語 — 翻訳されたセリフという視点から」, 『談話資料 日常生活のことば』, 現代日本語研究会, 遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子編, ひつじ書房, pp. 107-129.

壽岳章子 (1979) 『日本語と女』, 岩波新書.

中村桃子 (2007) 『女ことばはつくられる』, ひつじ書房.

(ささき えり・獨協大学ほか非常勤講師)